

〈公募論文〉

理性の目的論は意識の本質たりうるか

——フッサールにおける理性への意志をめぐる——

笹岡健太

はじめに

フッサールは、特にその晩年において、理性的であろうと意志することこそが意識の本質だという目的論を唱えていた。しかし、理性への意志は本当に意識の本質なのだろうか。理性の目的論、特に歴史の目的論にまで拡張されたそれはフッサール研究において頻繁に論じられているが、上記のような根本的な問いが理性の目的論に対して投げかけられることは、ほとんどない。本論は、この問いに答えることを通じて、理性への意志が意識生 (Bewusstseinsleben) において占める位置を明らかにすることを目指す。

本論は、まず第一節で、フッサール現象学において理性がど

のように規定されているのかを確認した上で、理性の目的論の内実を説明する。次いで第二節において、この目的論に対して批判的な考察を行い、理性への意志は意識の普遍的な本質ではなく、むしろ特殊な意識様態であることを明らかにする。

一 フッサールにおける理性の目的論

——準備的考察——

理性への意志が意識の普遍的な本質であることは、とりわけ晩年のフッサールにおいて強調されていることである。しかし、この時期のフッサールは、理性の目的論について多くを語りつつも、理性に関する意識分析をあまり詳細には展開していない。したがって、本節では準備的考察として、中期フッサールの代

表的著作「イデー」第一巻の「理性の現象学」(III/1, 334ff.)に依りながら、フッサールが理性と意識の関係をどのように捉えていたのかを明確にしておきたい。

たとえば、目の前の樹木がはっきりと知覚されたならば、われわれは、そのありありとした明瞭な現出に促されて、その樹木が本当に存在することを自然に信じる。また、その樹木の種類をはっきり見てとった上で、「その樹木は本当に林檎の木である」と信じることもある。フッサールは、現在における最も明瞭で生き生きとした現出もしくは直観を「有体的 (Leibhaft) 」や「原本的 (originär) 」と形容し (vgl. III/1, 315) 、「そのような現出 (直観) に動機づけられた上記のような存在信念を「理性的な定立」と呼ぶ (III/1, 316)。

たとえば、事物の有体的な現出にはいつでも、定立というものが入属している。……その際、定立は実は、現出と独特の仕方ですべてになっている。定立は現出によって「動機づけられて」いるのであり、しかも、これまた単に一般に動機づけられているのではなく、「理性的に、動機づけられて」いるのである (ibid.)。

逆に言えば、現出もしくは直観にもとづかず盲目的に (blind) 信じることは非理性的だということになる (vgl. III/1, 315f.)。

そして、「明瞭な現出に動機づけられた理性的な定立」の全

体が、「明証」と呼ばれる (vgl. III/1, 316)。この明証は、フッサールにおいては、真理と不可分の関係を持っている。先に述べたように、明証において理性的に定立されるものは、「本当に存在する」¹⁾、もしくは「本当にである」という性格であるが、このような「真なる存在」という存在性格こそが、フッサールにとつての「真理」なのである (vgl. III/1, 321f.)。

以上で「イデー」第一巻において理性とは何かを概観したが、このような意味での「理性」概念は、基本的に晩年まで維持されている (vgl. I, 91f, 95)。ただし、「イデー」第一巻より後の時期になると、このような「理性」概念に目的論的な規定が付け加わることになる。「デカルト的省察」と「危機」書を参照しつつ、そのことを確認しよう。

たとえば、机が知覚されている場合、机の内部や裏面までもが、ありありと与えられているわけではなく、それらは漠然と不明瞭に意識される。なおかつ、その机をとりまく周囲世界 (外部地平) もほんやりと意識される。このように、どのような意識野も必ずいくらか不明瞭な地平をともなっている。そして、このいくらか不明瞭な領野に対しては、より明瞭な直観 (現出) にもとづいた定立をしようとする意志がいつも必ず働いている、とフッサールは考える。このような意志こそが理性への意志であり、あらゆる具体的な意識は必ず理性への意志を有しているとフッサールは考えるのである。それゆえ、「デカルト的省察」では、「明証は……努力し実現しようとする意

図の目標という可能性を表しており、したがって、志向的な生にとつて普遍的で本質的な根本特徴を表している」と言われる(1, 92)。

ここで留意しなければならないのは、特に晩年において、フッサールは理性の定義に意志を含めるということである。すなわち、「人類は理性的であろうとする」と(Verunftigensein-wollen)によつてのみ理性的である(「VI, 275」というように理性が定義されるのである。そして、この「理性的であろうとする」とは、先に見たように、意識生にとつて「普遍的で本質的な根本特徴」であつた。それゆえ、「理性への意志としての」理性とは、いかなる偶然的、事実的能力でもなく、可能な偶然的、事実のための名称でもなく、むしろ、超越論的主観性一般の普遍的かつ本質的な構造形式である(1, 92)。この引用にも示唆されているように、フッサールにとつて何かの「本質」とは、その何かのあらゆる個別例に必ず当てはまること(本質普遍性と本質必然性)である(vgl. III/1, 12f., 19f.)。それゆえ、上の引用では(超越論的主観性は、或る場合にたまたま理性的であろうとすることもあるというわけではなく、むしろ、いかなる場合にも必ず理性的であろうとしてゐる)と述べられているのである。このことは、「デカルト的省察」と同時期(一九二九年)の「形式論理学と超越論的論理学」の中で、より明確に次のように表現されている。

明証性は、意識生の全体に関わる普遍的な志向性のあり方である。この明証性によつて意識生は、普遍的な目的論的構造をもち、「理性」へ方向づけられているというあり方(Angelsgesein auf "Vernunft")をするのであり、さらにはた、たえず、理性へと向かう傾向をもつ(XVII, 168f.)。

以上でフッサールにおける理性の目的論の内実を確認したが、果たしてこのような目的論は現象学的に証示されるのだろうか。すなわち、おのれの意識を現象学的に反省すれば、本当に理性への意志としての理性が意識の本質であることが確認されるのだろうか。

二 理性の目的論の特殊性

——批判的考察——

理性への意志としての理性は本当に意識の「普遍的かつ本質的な構造形式」なのだろうか。この問題に関してフッサールは、一枚岩の考えを持っていたわけではない。というのも、一方でフッサールは、前節で確認したように、理性の目的論を意識の普遍的な本質としながらも、他方では、理性への意志が必ずしもあらゆる意識の構造形式ではないことを示す三通りの分析を行っているからである。以下では、後者の三通りの分析の方が、対象そのものに即していることを示したい。

1 中立化への意志

前節で見てきたように、理性的な定立とは、「本当に存在する」、「本当に〜である」と信じることであるが、このような信念(定立)を遂行しない意識がある。たとえば、上半身が人間で下半身が馬であるケンタウロスを想像する場合、たしかにこのケンタウロスは志向的に意識されているが、本当に存在すると信じられているわけではない。なおかつ、「このケンタウロスは本当に存在しない」といった否定的な存在信念を遂行せずにケンタウロスを想像することもできる。このように対象について本当に存在するとも存在しないとも信じることなく単に想像することは、フッサールにおいては、中立性変様の一例と見なされる。なるほど、フッサールにおいて、中立性変様と想像との混同は防がなければならないとも言われているが(III/I, 250)、しかし、そのように言われるのは、「想像は……: 全般的な中立性変様からは区別されなければならない。」からなのである(*ibid.*)。想像は準現在化の中立性変様であって(*ibid.*)、中立性変様には他にも、現在化(知覚)の中立性変様とといったものもある(III/I, 251f.)。つまり、想像は、「全般的な中立性変様」と混同されてはならないが、「想像それ自身は、実際、一つの中立性変様である」(III/I, 250)。

このような中立性変様は、「中立化された意識」や「中立化されたノエシス」とも呼ばれるが(III/I, 223)、この種の意識は、そもそも何かの存在を定立する働きではないので、理性的

な定立でもなければ、非理性的な定立でもない。それゆえ、「中立化されたノエシス」とっては、理性と非理性の問いは、何の意味もなさない」(III/I, 249)。

このような中立性変様をわれわれはある程度自由に、行うことができる(§2, III/I, 247f., 36)。たとえば、やろうと思えば、われわれはケンタウロスを想像することができる。それゆえ、当然のことだが、われわれは、想像しようとすることもできるのである。そして、これまでの議論を踏まえて言えば、想像しようとすることは、想像という中立性変様への意志を遂行することである。この意志は、決して理性への意志ではなく、むしろ理性的であることを差し控えようとする意志、すなわち真なる存在の定立を差し控えようとする意志である。たとえば、われわれがケンタウロスを想像しようとする時には、意識はへありありとした現出に動機づけられてケンタウロスの存在を信じていること」を指しているのではなく、むしろ、そのような存在信念が働かないような意識様態へと移行しようとしているのである。つまり、「想像しよう」とする意志は、理性的でもなければ非理性的でもないような意識様態へと移行することを指しているものであり、理性的であらうとする意志ではない。もちろん、積極的にケンタウロスを想像しようとしている場合にも、現実世界は与えられているが、その際、現実世界はいわば背景に退いており、意志が目指しているのは、ケンタウロスについての非定立的な意識への移行である。それゆえ、ここに見られ

るのは、理性への意志をもたないような意識、理性的であることを差し控えようとするような意識である（なお、3で説明されるように、背景的な領野についての意識は必ずしも意志的な意識ではない）。

2 非真実的な価値へと向かう意識

1では、理性への意志をもたず、逆に、理性的定立の遮断への意志をもつような意識様態について見てきたが、理性的な定立とは異なるものに向けられているような意識形態をさらにもう一つ取り上げたい。より具体的に言えば、以下では、もっぱら美しさのような、 \langle 真なる存在 \rangle 以外の価値に向けられた意識様態を現象学的に提示してみたい。

たとえば、美術評論家のような理論的な態度をとることをせずに、一枚の絵の美しさに夢中になっている場合、意識は、真なる存在を定立しようなどと思っておらず、むしろ、美しさという価値に向かっていると言える。このような事例について、フッサールは次のように述べている。

われわれは、一枚の絵を眺めて「楽しむ」ことができる。

この場合のわれわれは審美的な快感に浸って、まさしく絵を「楽しむ」という快楽的な態度で生きている。しかし、その後われわれはその絵を美術評論家や美術史家の目で眺めて「美しい」と判定することもできる。この場合、われ

われは理論的に判断する態度を取っているのであって、もはや評価し楽しむ態度で生きているのではない（IV, 8）。

ここでは、「一枚の絵」を「楽しむ態度」は「快楽的な態度」や「心情的な態度（Gemütsverhalten）」（*ibid.*）と呼ばれ、理論的な態度とは区別されている。理論的な態度とは、対象を「見ること」を遂行した上で、能動的に真なる存在を定立しようとするような態度である（*vgl.* IV, 36）。ここで、ありありとした現出（直観）に動機づけられた存在定立が「理性的」と呼ばれていたことを思い起こすなら、理論的な態度とは、理性的な態度、あるいは理性的な態度の一種だということがわかる。

先の引用では、そのような理論的—理性的な態度以前に、「一枚の絵を眺めて『楽しむ』という『快楽的な態度』がある」と述べられている。その直後の箇所では、「その絵を美術評論家や美術史家の眼で眺めて『美しい』と判定することもできる」と述べられているが、その場合の絵は「もはやただ単に楽しみに没頭している時の対象ではなく、特別な信念定立的（doxohetisch）な意味での対象である」（IV, 9）。この場合、「直観されているその対象は、審美的な喜びに固有の（*様相存在を構成する*）性格をともなって与えられるのである」（*ibid.*）。ここでの「特別な信念定立的な意味での対象」とは、真に存在するものとして能動的に定立された対象のことである。つまり、生き生きとした美しさの現出に動機づけられつつ「美しい」

と判定する」ならば、そのことによって、「美しい」(schön-gein) という「様相存在 (So-sein)」が定立されるのである。

逆に言えば、そのような理論的な態度、すなわち「美術評論家や美術史家」のような態度をとらず、「ただ単に楽しみに没頭している」時には、そのような存在定立は遂行されない。

「ただ単に楽しみに没頭している」場合、たしかに、絵の存在もその周囲世界の存在も信じられて(定立されて)いる。しかし、この場合、絵の美しさへと没頭している意識が「主作用 (Hauptakt)」であるのに対して、それらの定立的意識は「背景」に退いている (vgl. IV, 12f.)。つまり、この場合、絵の美しさへと意識は没頭しているのであって、その絵の現実存在や周囲世界の現実存在は、非主題的・背景的に信じられているに過ぎない。なおかつ、背景的な意識は、3で確認されるように、何かに向けられた(向かう)意識的な意識ではない。また、意識が、楽しみつつ物体としての絵に「向いている」と言える状態もありうるだろうが、そのことは理性への意志が働いていることと同じではない。前節で述べたように、理性への意志とは、単に意識が「向いている」ということではなく、まだ十分に明瞭ではない領野をより明瞭にして定立しようとする意志だが、そのような意志が、絵の内部地平などに対して常に働いていると考えるのは事象に即していないだろう。それゆえ、理論的な態度以前の「快楽的な態度」「心情的な態度」において、意識は、真なる存在を定立しようとする意志、すなわち理性への意

志を持たない場合があると言える。

3 意志を欠いた意識

1と2で提示されたのは、「真なる存在の定立」とは異なるものに向かう意識様態であった。そこでは、理性とは異なるものに向けられた意識が提示された。だが、そもそも何かに向けられた」というあり方をしていない意識様態もありうるのではないか。たとえば、寝覚めにぼんやりとしている場合、あるいは、疲れて全く無気力になっている場合などがありうる。フッサールも、「ぼんやりとした意識 (dummes Bewusstsein)」という意識様態があることを認めている (IV, 107f.)。こうした意識様態に対して、能動的に対象に向けられた意識は「目覚めた意識」や「顕在的なコギト」と呼ばれる (IV, 107f.)。この二つの意識様態の相互関係について、フッサールは次のように述べている。

……意識において顕在的なコギトが遂行されていなければならぬということ、必ずしも意識の本質には含まれていない。われわれの目覚めた意識も、居眠りしてて全くぼんやりとした意識によって一時的に中断され、顕在的な視野と不明瞭な背景とを区別できなくなることもある。そうなる時、すべてが背景になり、すべてが不明瞭になる (ibid.)。

「全てが背景になり、全てが不明瞭になる」ということは、一切の意識作用が遂行されていないということであり、自我が「全く作用を遂行しない、自我」になっているということである(IV, 99)。この場合、理性への意志を含めた「意志作用」(Willensakt) (III/1, 268, 272) もまた、遂行されていないことになる。

ただし、「全てが背景になり、全てが不明瞭になる」といっても、不明瞭な背景には、それに相関する背景意識が対応しており、この意識も、「非常に「不分明な」志向性」とはいえ、志向性 (Intentionalität) を有している (IV, 13)。それゆえ、「全てが背景になり、全てが不明瞭になる」という状態になっても、その「背景」に対して弱く受動的に向けられた意識、微弱的な意志的意識が働いているのではないか、という反論も考えられる。たしかに、ヘルトやラントグレーベが指摘しているようにフッサールにおける志向性が本質的に意志的な意識であるならば、背景についての意識も意志的な意識だということになるだろう (vgl. Held 1978, S. 5ff.; Held 1972, S. 1ff.; Landgrebe 1977)。しかし、志向性「すなわち『』」についての意識は、「必ず何かに向けられている」という性質を持つわけではない。たとえば、日常生活において私が見慣れた机を目にする時、その机の裏側に、弱い仕方ですら意識が向けられることはあまりない(ここでの日常生活における知覚は現象学的反省によって捉えられ記述されている)。この場合、机の裏側は、机の正面の知覚

にとまなわれておのずと空虚に意識されるのであって、(私によって振り向けられた意識の向かう先) といったあり方をしていない。実際、フッサールも「イデー」第一巻で、「『意志の相関対象』の方に向けられているというあり方』は、『必ずしも全ての体験のうちに見出されるものではない』と述べている (III/1, 188)。そして、ここでは、『向けられているというあり方』をしていない意識の例として、『背景』についての意識が挙げられる (III/1, 188f. vgl. 179)。それゆえ、『全てが背景になり、全てが不明瞭になる』ような『ほんやりした意識』は、『ほんやりと背景に向けられている』という意味での(広義の)意志すらもたず、何らかの目的に向けられた意識ではないのである。

以上のようなわれわれの主張に対して、フッサール現象学に慣れ親しんだ者であれば、次のような疑問を感じるかもしれない。そうは言っても、地平についての意識が志向性を有しているならば、そのほんやりした意識は、直観的な充実を指す志向も有しているのではないか、それゆえ、広い意味での(充実への)意志を持つのではないか。このような疑問に対しては、次のように答えたい。たしかに、フッサールは、いくつかの文脈では、背景についての空虚な意識、直観的に充実されていない意識を(充実を指す志向)と捉えている。しかし、実際には、空虚な意識は必ずしも志向というあり方をしていない。なるほど、私が、『机の裏面を直接見て確かめよう』とほんの少し

でも思うならば、その時には空虚な地平についての意識は、直観的な充実を目指す志向をとまなうことになる。しかし、先にも触れたように、見慣れた机を目にする時などには、少しもそのように思わない場合も多い。フッサールも、一九二〇—二一年の講義草稿の中で次のように述べている。「あらゆる意識に……努力や志向すること (Intendieren) が、備わっていると簡単に言うことはできない。つまり、あらゆる意識に、向けられているというあり方 (Gerichtet-sein) が、備わっているわけではない」(XI, 85)。この Intendieren は Intention や Intentio と同義的な意味で用いられている (vgl. XI, 84f.)。また、この引用に見られるように、「志向」とは、「向けられているというあり方」のこともある。そして、先述したように、「それ」＝「意識の相関対象」の方に向けられているというあり方は、「必ずしも全ての体験のうちに見出されうるものではない」のであり、その一例として「背景」についての意識が挙げられていたのであった。そうすると、「背景」についての意識は、必ずしも「志向」というあり方をしていないわけではないということになる。つまり、ここでは、〈充実〉というテロスに向かう志向〉を持たない意識をフッサール自身が認めているのである。本節では、理性的であろうとしない三種類の意識様態を取り上げた。それらは、理性の目的論に収まらない意識様態であると言える。理性への意志は、意識の本質ではなく、むしろ意識生の中の特殊な一様態に過ぎないのである。

おわりに

フッサールの理性の目的論に反して、〈理性的であろうと意志すること〉は、意識の本質ではない。実際、フッサール自身も、理性への意志を持たない三種類の意識様態について示唆していたのである。

フッサールはその晩年に、学問的な理性が非合理主義によって侵される「危機」を感じていたわけだが、たしかに、学問を営む場では、できるだけ理性的であろうとすることが普遍的に要求されていると言える。しかし、理性への意志を意識一般の普遍的な本質とするのはゆきすぎた理性中心主義であろう。理性への意志は、むしろ意識生において特殊な意識様態であるように思われる。学問の「危機」に関しても、理性のこのような特殊性を踏まえた上で、その回避策が考えられるべきである¹¹⁾。

また、意識が真理への意志なしに美しさやその他の価値を目指すことがあるとしたら、それらの価値や感情的な体験は、単に理性の目的論に組み込まれるだけのものではなく、固有の意義を持つことになるだろう。さらに、いかなる目的も持たない意識様態として、朦朧とした意識だけではなく、満ち足りていないにも求めないような意識様態や、何かを目指すこと一般をあきらめた意識様態もありうるように思われる。つまり、意識生を貫く一つの普遍的な目的論などなく、時期によって異なる

目的を持ったリ、なにも目指さなかつたりするのが意識生のあ
るがままの在り方ではないだろうか。こういった多様な目的と
無目的によって織りなされるものとしての意識生の考察は今後
の課題である。

注

- (1) フッサールは、原本的に与える意識とそうでない意識との
対立について、算術的判断だけではなく、風景の知覚や想起
を例に挙げてゐる(III/1, 314f.)。同じ節で理性意識の例
として事物知覚の定立が挙げられてゐる(III/1, 316)。それゆゑ、
事物が「現実性(wirklich)存在する」という意味で「本当
に存在する」と述べることも許されるだろう(vgl. III/1,
314, 324-6)。紙幅の都合により、「本当にーである」という
性格に関わる、判断や本質観取における定立については詳論
できないが、この意味での定立も、それを動機づける直観に
明瞭さ(充実)の度合がある点、最大の明瞭さが原本的と形
容される点に関しては、事物の現存在定立と同じである
(vgl. III/1, 314f.)。それゆゑ、フッサールにおいては、いず
れの意味での「本当の存在」に關しても、明瞭さの度合いや
範囲がより多い現出にもとづいた定立を目指すという理性の
目的論に組み込まれる(本論はこの目的論を支持しない)。
- (2) 地平的な領野をどんなに明証化していても、世界地平全
体を完全に明証化することはできず、いくら不明瞭な地平
は残り続ける。だからこそ、絶えず地平をより広範により明
瞭にしていきながら、そのより明瞭な直観にもとづいて対象
- (3) 再想起のように原理的に対象が原本的に与えられない意識
を定立していかうとする意志が働くとするのが理性の目的論
であると言える。それゆゑ、アギレは、「目的論は……有限
性の意識の表現である」と述べてゐる(Aguirre 1970, S.
15)。本論は、(特に第二節で)このような理性の普遍的な
目的論を批判しようとしている。
- (4) 再想起のように原理的に対象が原本的に与えられない意識
も、より明瞭な所与性を目指しているとフッサールは考えて
いる。再想起において原本的な所与性は、到達不可能だが接
近可能な「理念」「テロス」だと考えられているのである
(笹岡二〇〇八、一九五一―八頁)。
- (5) 必然的明証は、原印象の位相においては、十全的明証、
すなわち、対象が残る限なく原本的に直観されて定立される
ような明証である(vgl. III/1, 314-7)。体験の内在的知覚も
その現存在に關して十全的明証をもたらす。それに対して、
蓋然的(gesetorisch)明証は、不十全な明証に留まるとさ
れる(III/1, 316)。しかし、必然的かつ十全的な明証に
おいても、あらゆる本質や判断などが十全に与えられているわ
けではないし、過去の地平が必ずしもなわれない。このように
十全的かつ必然的な明証意識もいくら不十全な明証の領
野をとまなうので、その領野をより十全に近い明証にもたら
していかうとする意志が働く余地がある。体験についても、
そのすべての本質構造が必然的に与えられているわけでは
なく、不明瞭な時間地平がともなわれている。それゆゑ、フ
ッサールにおいては、蓋然的明証はもちろん、必然的明証
も、体験についての十全な明証も、不明瞭な領野に対する理

性への意志をとまなうというかたちで、理性の普遍的目的論に組み込まれるようになる。

- (5) 「志向から充実へという動向を、そしてまた、意識流を貫く動的な性格を「理性への意志」を語ったと解釈できる」という見解もある。だが、本論第二節で示されるように意識流において「理性への意志」が働いていない期間があるならば、「理性への意志」が「意識流を貫く動的な性格」だとは言えないだろう。また、そもそも「志向」をまたない意識もありうるとしたら（第二節の3）、「志向から充実へという動向」は必ずしも意識の時間を貫くものではない。それゆえ、上の「解釈」を採用したとしても、理性への意志は意識の本質とは言えないだろう。

- (6) この二側面の整合性についてフッサール自身は、少なくとも直接的には論じていない。本論は、この二側面は対立すると考えており、なおかつ、後者の側面こそが事象に即していると考ええる。その根拠は、私自身の意識の反省である。本節では、随所で私自身の現象学的反省を展開しており、それに基づいてフッサールの三種類の分析は擁護されている。

- (7) 現実世界は単に経験的に与えられるのではなく、知覚などによって特定の対象が与えられるのに先立って地平的に前もって与えられている。

- (8) 「顕在的なコギト」において「まなきし」が、auf... sich richten という意味で「向けられる」ということが述べられた後で、「このような顕在的に、相関対象にかかわるといふこと」[すなわち] Zu ihm hin gerichtel sein は、必ずしも全

ての体験のうちに見出されるものではない」と述べられている (III/1, 188)。「あらゆる意識」Gerichtetsein が備わっているわけではなく、「(XI, 85)とも言われる。それゆえ意識一般の特徴である「志向性」の、い、い、かえ、は、auf etwas sich richten ではなく、sich bewusstsein von etwas であらう (III/1, 188)。この「或るもの」についての意識」が、auf etwas sich richten を Ichwendung によって特徴づけられる顕在的なコギトと、そのような特徴をもたない非顕在的な意識とに大別される。つまり、sich richten と sich zuwenden のどちらの意味においても、地平意識のような非顕在的な意識自身は、「向けられた」という性格をもたない(いつも必ずではないが、そのような性格をもった意識をとまなうことはある)。

- (9) 一般に、日常生活における意識様態について記述しているからといって、自然的態度をとっているとは限らない。現象学的態度において、遮断された自然的態度における定立は反省の対象となりうるし、自然的態度において知覚されていた物も、括弧に入れられ、ノエマとして分析の対象になりうる (笹岡二〇〇六、九五頁: vgl. auch III/1, 386f.)。つまり、ここで私は、現象学的態度(立場)から、以前の(現象学的態度をとるようになってからは遂行されていない)自然的態度を反省の対象にしているのである。

- (10) フッサールにおける歴史的目的論の出発点にある危機意識に関しては、フッサールが「30年代の歴史的经验」から「おのれの隠された究極的な原動力」を得ているとの指摘がある

(vgl. Landgrebe 1963, S. 189)° こゝでの「30年代の歴史的經驗」とは、ナチズムの台頭とそれによるフッサールへの追害のことを指しているものと思われる。

(11) 学問的な場に非理性的な要素がなるべく入り込まないようにするには、学会の綱領、査読体制等々の存在によって或る程度動機づけられるだろう。つまり、人は、学問の世界でやっっていくという目的を実現するための手段として、理性的であるように促される。目的と手段に関しては、目的の意志が手段への意志を動機づけると述べられている(III/1, 101; vgl. IV, 18)。また、フフエンターは、「動機を」意志の根拠となる何ものか」と捉えており(Pfänder 1930, S. 152)°これはフッサールにおける意志の動機づけに近い。

参 考 文 献

フッサール全集(*Husserliana*)からの引用は、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字によって示した。引用文中の強調は筆者による。「」は筆者による補足を示している。

Aguirre, A., 1970, "Genetische Phänomenologie und Reduktion", in *Phänomenologica*, Bd. 38.

Held, K., 1980, "Husserls Rückgang auf das phänomenon", in *Dialektik und Genesis in der Phänomenologie, Phänomenologische Forschungen*, Bd. 10

Held, K., 1972, "Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie", in *Phänomenologica*, Bd. 49.

Landgrebe, L., 1977, "Das Problem der Teleologie und der

Leiblichkeit", in *Phänomenologie und Marxismus*, Bd. 1. ———, 1963, *Der Weg der Phänomenologie—Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung*, Gütersloh.

Pfänder, A., 1930, *Phänomenologie des Willens: eine psychologische Analyse. Motive und Motivation*, J. A. Barth.

笹岡健太, 二〇〇六年, 「知覚される前の事物についての意識——時間的地平と空間的地平の交錯」、『現象学年報』第二二号、日本現象学会。

———, 二〇〇八年, 「かつての体験への懐疑——フッサール時間論における過去の超越性をめぐって」, 「知を愛する者と疑う心——懐疑論八章——」, 見洋書房。

(ちろちか けんた・京都大学)